



一人の百歩より百人の一步

衆力の結集が会社成長の要諦

税理士法人TACT高井法博会計事務所
TACTグループ関連十二社代表

税理士 高井 法博

私はメモ魔である。メモ用紙とペンが自宅のリビングと風呂、トイレや枕元等あらゆる場所に置いてある。夜遅く帰るとまず、当日自宅に届いた郵便物を見る。返事の必要なものは即座に書き、電話が必要なものは即電話する。しかし大体は、夜も十二時近くなっているのに、メモ用紙にかけ先と電話番号、内容や要点を簡条書きにする。この間に、子供が女房が準備してくれた遅い夕食と缶ビールを片手に、夕刊に赤のマーカーペンを走らせながら摂る。正直、私の一日のうちで一番ホッとする時間である。本来、遅い夕食は医学上タブーと言われるが、朝は時間に追われ軽食で、昼はダイエツト食で夜も軽いものを食べていては生きている価値がないと思ひ、質・量共にしっかりと摂る。食事をしながら、昼間やり残した仕事や見られなかった書類、日報に目を通しながら、新たに思いつきひらめくこと、気になり翌日指示すべきこと等を順にメモしていく。ここらが終わる頃には、時計はとつとくに新しい日に入っている。寝入る前の少しの時間、枕元に置いてある数冊の本に目を通して数分で寝入ってしまう。睡眠中、突然目を覚ますことも時々ある。今までに解決

できなかった難問のヒントが思いつく。眠くて仕方がないが、そのまま眠ると忘れてしまいそうなのですぐ枕元のメモ用紙に記入する。その後、そのまま眠れる時と目が冴えてしまい、翌朝まで眠れない時がある。普段、全力で生きているから寝床に入るとスグ眠ってしまうが、小心者の私は気になることがあると、朝方三時、四時まで眠れず、これでは翌日の仕事に影響すると思ひ、まれに睡眠薬を飲むこともある。大体、朝は六時前後に起床し、まず朝刊と赤のマーカーペンを持ち、トイレに入る。次に日経を持ち、風呂に入る。ここにも各々メモ用紙がある。このうち最初に書く一枚には、日付と共に『一日一生』『一期一会』と記入し、今日も全力で誤りなき一日にしようと思ひ、昨晩帰宅以降、何枚か記入したメモ用紙をクリップで下に綴る。次いで朝食を摂りながら続きの新聞に目を通す。その後、昨晩来处理した書類を二つの鞆に入れ、メモを助手席に置き車で出勤する。車に乗ると同時にメモ用紙を見ながら電話を数本かけるうちに事務所に着く。

一・弱者の戦略。他より一步先んじる為!!

以上は私が創業以来、会社を退社して

から翌朝出社までの毎日のライフサイクルである。いや、創業以前の会社員時代からの行動パターンでもあった。能力も金も地盤も人脈も他の人に比べ、秀でるものが何もない私が他人より一步上に出る為には睡眠、食事、入浴、トイレ以外の時間は休みなく働くこと以外に勝ち目はなかった。まさに寝食を忘れて人の倍働く。不器用な私は、家庭と仕事の両立は無理だった。それでもまだ時間が足らなかった。私のこの考え方の基礎は、小さい時から親しんだ本と、多くのポジティブな人との出逢いによって学び、それを実践に移したことによって体得した。『先憂後楽』これは仕事にも人生にも当てはまる。自分がした苦勞や努力以上のものを手に入れることはできない。人生は一度っきりのものである。よって苦勞はできる限り若いうちにすべきで、やがてその苦勞は報われ、大きな成果・楽しみを得ることができると確信した。

また私の生家はお寺で、何人もの和尚から言われた、人間一生懸命働き努力すれば、報われない訳がないという『因果応報』の教えも知らず知らずに体に染み付いていた。

このような私の『生き方』に共鳴してついて来てくれた社員や家族の頑張りとお客様の支援によって、至らないところばかりではあるが、何とか県下では知られる事務所になってきた。

二・一人の百歩より百人の一步

かつて二十才代の前半の頃、私は自分の能力の限界を超える仕事に逃げないで対峙し、自律神経に異常を来し、不眠症、過呼吸、胃や心臓の不調に陥っていた頃、

私は多分三十才、多く見ても四十才までは生きられないだろうと日頃の苦しさをなかでぼんやりと考えていた。当時の日記に『太く短く』とよく書いていた。長くだらだらと生きるより、自分の命を燃やし尽くして前向きに生きようと思ひ、一日四〜五時間の睡眠で人から見れば命を削っているのかと思われる位、勉強し働いた。しかし気付いてみると、私もいつの間にか六十才を過ぎ、昔ならとつとに定年の年を超えている。企業も創業時また新規部門の立ち上げ時には、一人の気違ひのようなリーダーのもとに共鳴する数人の同志の人並みはずれた努力によって、同業より一步頭を出し、生き残る。その為には不可欠な道程ではある。

しかし、ある程度の規模になってくると、次の段階への変革が必要となる。一人の社員の百歩に頼るのではなく、百人の社員が一步ずつ歩むという地道な前進に変え、さらにかに定着、継続させていくかである。『二人の百歩より百人の一步』この言葉は、今をときめく超優良企業を創られた日本電産の永守重信社長より教えて頂いた。もちろん、成功する為の基本的な生き方としては、一人で百歩進もうと一生懸命努力する姿勢は不可欠だが、私をはじめ幹部自身の最も重要な仕事は、部下の育成を強く意識し『二人の百歩より、思想・考え方を共有する百人の一步の方がはるかに会社を強くし、企業の永続性を保証する』ことを強く自覚しなければならぬ。そして、この活動を具現化できる幹部の中から真の幹部後継者が育つてくると確信するこの頃である。